

プロローグ：第一次世界大戦と世界革命

第1章 はじめに（第一次世界大戦を終えて）

歴史は、理想を実現したいという「人間の情熱 **our passions**」によって作られてきた。「人間の情熱が1つに結集されること **collective passions**」で作られてきた。新しい政治体制の創設や国境線の確定、陸軍や海軍、学校制度、整備された交通路、法制度の登場などが可能であったのは、「1つに結集された人間の情熱」のおかげであった。個人が戦争・革命・冒険行のような「共同事業 **common enterprise**」に踏み切ることができたのも、「1つに結集された人間の情熱」のおかげであった。歴史の転換期には、「政治 **political effort**」が「人間の情熱」を「1つに結集 **unanimity and coherence**」してきた。

国や文化が違えば「情熱 **passions**」の内容も違って来る。たとえば、ピューリタンは人間の性欲を好ましくないものと考えて性欲の抑制に熱心であった。またロシア人は性欲の抑制には無関心で、株の売買や競馬で発揮される人間の投機本能を抑制することに熱心であった。どんな「情熱」を抑制するかによって生み出される人間のタイプは違って来るし、社会のタイプも違って来る。

「理性の時代 **Age of Reason**」は「情熱」が無視されたままであった。「歴史の進展と共に人間は情熱と無縁になっていく **the increase of Reason was the summary of human history**」と信じられていたからである。しかし「理性と啓蒙 **Reason and Enlightenment**」の追求や科学の発展（それが敬意に値する成果を挙げてきたことは認めざるを得ない）を可能にしたのも、じつは「人間の情熱」であった。

そこで本書では、「人間の情熱」がどのように歴史を動かしてきたかを示してみたいと思う。漠然と歴史を眺めていると、統治のあり方や「公共心 **public morals**」のあり方を決めてきた「人間の情熱」は、およそ「法則 **order**」とは無縁のように思えてくる。しかし、そこには一定の「法則」が存在する。まず「人間の情熱」には、終わりということがない。「人間の情熱」は、それが強ければ強いほど止まるところを知らないからである。人間は1つの夢を実現しても、それで満足することがない。かつて我々の父祖たちは「理性 **Reason**」のために死ぬことを厭わなかったが、彼らが死すら厭わなかったのは、「知識の獲得によって人間のあらゆる問題が解決できると確信していたから **to find the apples of knowledge and eternal life, both in one**」だけではなかった。

個人や国民が理想の実現に「情熱」を燃やすことができなくなったら、そのとき個人や国民は歴史の舞台から退場するしかない。「人間はつねに情熱を燃やしている必要がある **The heart of man either falls in love with somebody or something**」からである。情熱を燃やせなくなったとき、「人間は正気でなくなる **the heart falls ill**」。「人間の心はつねに情熱によって満たされている必要があるから **The heart can never go unoccupied**」である。そこで問題となってくるのが、何かに対する「情熱」が覚めたあと、つぎに何に「情熱」を燃やすかということである。

それにしても、どのようにして「人間の情熱」は歴史を作ってきたのか。はたして、その痕跡を辿り直すことは可能なのであろうか。

我々が犠牲を払ってもよいと考えるのは、どんな時どんな場合なのであろうか。金銭的な犠牲だけでなく、場合によっては生命すら犠牲にしてもよいと考えるのは、どんな時どんな場合なのであろうか。あるいは、何を犠牲に値すると考え、何を犠牲に値しないと考えるのであろうか。

「情熱」を感じるからこそ我々は犠牲を払うのを厭わないのであり、我々が払う犠牲のおかげで我々の生き方は変わり、我々の統治制度は変わるのである。「情熱」のために犠牲を払うことができるのは人間だけである。そのおかげで人間はよき統治制度を手に入れることができた。

この本のテーマはヨーロッパの歴史である。ヨーロッパの歴史に関しては、すでに様々な形で研究がなされてきたが、ヨーロッパの歴史研究を最初に提唱したのは、1803年にドイツ語の雑誌『ヨーロッパ Europa』を創刊したシュレーゲル Friedrich Schlegel であった。彼は、当時の「革新派 moderns」が忘れていたことを指摘してみせた。つまり、人類の歴史は何千年も前の古代エジプトや古代バビロニアで始まったのではなく、千年前にヨーロッパで始まったのである。千年にわたるヨーロッパの歴史がうまく説明できなければ、何も説明したことにはならない。つまりヨーロッパの歴史がうまく説明できるか否かによって、人類の歴史がうまく説明できるか否かが決まってくるのである。

この本のアイデアは、第一次世界大戦の塹壕のなかで生まれた（1917年、私はベルダンの戦場にいた）。あの戦争で前線にいた兵士たちは、銃後の国民とは違ったことを経験していた。あの戦争で殺され、傷ついた兵士の経験がつぎの世代の子供たちに受け継がれなければ、我々に未来はない。第一次世界大戦の経験を踏まえた歴史研究の方法や歴史叙述のあり方を完成するまでは、歴史家にとって戦争は終わっていない。少なくとも私にとって、戦争は終わっていない。

誰もが、あの戦争のことを忘れたがっている。戦後に起きたさまざまな出来事にかまけて、我々はあの戦争のことを忘れようとしている。歴史家も第一次世界大戦までの歴史を「戦前の歴史」で片付けてしまい、あの戦争が持っていた本当の意味を探ろうとしない。百年前のナポレオン戦争とおなじ戦争であったとか、年表の項目が1つ増えただけといったことで片付けようとしている。

しかし、あの戦争は年表の項目を1つ増やしただけの戦争ではなかった。あの戦争のあと、まったく新しい時代が始まったのである。歴史を書き換えてしまうような戦争、過去が持っていた意味を変えてしまうような戦争、それが第一次世界大戦であった。あの戦争のあと、男女関係のあり方や家族のあり方が変わってしまっただけでなく、「生きることに対する意味づけ conviction」まで変わってしまった。過去が違って見えてくるようになったのである。第一次世界大戦を経験したことで、ヨーロッパを国別に分けて考えることが間違っていることに我々は気づいたのである。あの戦争で経験したことの意味を理解できないような人間には、「歴史を語る資格はない he would not deserve any history」。あの戦争を経験したあとも歴史を書き換える必要性を認めないような人間には、「歴史を語る資格はない」。「そんな人間は、あの戦争で人間であることを止めてしまった Their souls had been killed in the World War」のである。

この本に何か取り柄があるとすれば、第一次世界大戦の経験を踏まえてヨーロッパ史の書き換えを試みたということより、むしろ第一次世界大戦が持った意味を直視しようとしていることである。読者は自分の経験に照らし合わせて、私の主張が当たっているか否かを判断できるはずである。そうすることで、初めて著者と読者の対話も可能になってくる。第一次世界大戦（これを「世界革命 World Revolution」とか「ヨーロッパの自殺行為 Suicide of Europe」、あるいは「アメリカによるヨーロッパの制覇 Crusade of America」と呼ぶ者もいる）が持った特別な意味を認めないと言うなら、その根拠を示すべきである。第一次世界大戦を経験した読者なら、その特別な意味を認めるはずである。

第一次世界大戦を経験していながら、その特別な意味をまったく認めようとしなない読者が居るかもしれない。この本が「戦争と革命の業火 hellfire of war and revolution」から生まれて来たことに衝撃を覚えない読者は、その特別な意味を認めようとしなない読者の1人と言える。

しかし、第一次世界大戦が持った特別な意味を認めてくれる読者も多い。そんな読者なら、私が第一次世界大戦の過酷な経験が忘れ去られようとしていることに警鐘を鳴らしている理由がよく判るはずである。人間は忘れる名人であり、とくに過酷な経験を忘れる名人である。

科学の世界で新しい発見が可能であったのは、何かに驚嘆し、またそのことに執着し続けてきた者

がいたからであった。無関心からは何も生まれて来ない。ニュートンが万有引力の法則を発見するまで多くのリンゴが木から落ちていたし、第一次世界大戦以前にも多くの生命が戦争で失われていた。しかし、「戦争を終わらせるための戦争 The War to end War」と言われた第一次世界大戦は、それまでの戦争とは丸で違った戦争であった。神聖視されていた「国民・民族 nation」といった考え方が、じつは「とんでもないシロモノであったことが判明した really discoverable」戦争であった。

第一次世界大戦のおかげで過去も未来も違って見えるようになった。人間に対する考え方も変わってしまった。物理学でプランク Max Planck が起こした革命(量子論)、動物学でダーウィン Charles Darwin が起こした革命(進化論)、経済学でマルクスが起こした革命、神学で自由主義神学が引き起こした革命に匹敵する革命を、第一次世界大戦は歴史学の分野で引き起こすことになった。

人間が生きていくためには、「この世 Earth」・「あの世 Heaven」・「他者 Society」の3つが欠かせない。その具体的なあり方は時代によって違っているが、いつの時代も人間はこの3つを必要としてきた。しかし混乱・無秩序・意見対立などが、その存続を脅かして来たことも事実である。とくに第一次世界大戦前に歴史観と自然観、物理学と神学の対立が深刻になっており、第一次世界大戦の勃発はその結果であった(当時、専門家を自称していた大学の研究者たちは大戦の勃発を予想しておらず、大戦の勃発に驚いていた)。

私が以下で展開してみせるような歴史観を獲得することができたのは、第一次世界大戦を経験したおかげである。人間にとって何が大切で何が大切でないかを教えてくれたのが、あの戦争であった。何百万・何千万という人間が犠牲になったあとで、やっと歴史とは「自分自身の歴史 autobiography」であるということが判ってきたのである。

私には、舞台上ショーを見ているように歴史を傍観していることはできない。ヨーロッパで数々の帝国が登場して来たこと、アジアで多くの文明が消えていったこと、古典主義とロマン主義の登場と衰退など、これまで輝かしい歴史上の出来事とされて来たことが第一次世界大戦のあと、およそ無意味としか思えなくなった。この戦争で死んでいった2千万人の兵士が、その事実を突き付けたのである。歴史とは、すなわち「自分自身の歴史」に他ならないことが判ったのである。それまで重要だと考えられてきた無数の史実も、そのすべてが無意味だと判ったのである。そんなものは図書館の本に積もった埃のようなもので、およそ無意味である。

しかし、もし歴史が「自分自身の歴史」になれば、エデンの園で「知恵の木 tree of knowledge」の実を取って食べたからといって、「不死の木 tree of life」の実を取って食べることが禁じられることは無くなるかもしれない(歴史に関する知識が生きたものになり、現実の問題を解決するのに役立つかもしれない)。

第一次世界大戦を経験した世代は、いわばエデンの園で「知恵の木」の実を食べてしまったのである。そのことを正直に認めさえすれば、あるいは問題を解決する方法が見つかるかもしれない。傍観者の立場に立って歴史を見ていると、我々の過去は混乱しているだけで、未来も暗いということになる。しかし、我々がお互いに人間としての連帯感を忘れず、人間として共感しあう心を失わなければ、まだ希望はあるというのが私の確信しているところである。

まずは歴史を「自分自身の歴史」として読むことから始めよう。そうすれば過去や現在だけでなく、未来にも関心が向かうはずである。

ただ気になるのは、はたして人間にそんなことができるのかということである。少なくとも今のままでは、現代人が歴史を「自分自身の歴史」として読むことはないであろう。刺激だけを追い求め、驚くほど過去を忘れるのが得意な現代人にとって、歴史を「自分自身の歴史」として読むことなど、そもそ

も可能なのであろうか。幸いなことに、人間は過去を記憶に留めておく方法をいろいろと工夫してきた。この本でも、政治的な出来事と教会関係の出来事は重視している。ある国がどんな出来事を記念日として残し、どんな出来事を記念日として残さなかったのかということを確認すれば、その国の教育のあり方や伝統が何時どう変わったかを知ることができる。昔から人間は、記念日・祭日・「聖なる日として労働を避ける安息日 holiday」・食事の作法・休暇の取り方・宗教的な儀式や象徴などの形で過去を記録してきた。歴史家は、この記録を活用すべきである。

「聖なる日として労働を避ける安息日」が設けられたのは、政治的な理由からであった。しかし、それが休日として定着するには 10 年や 20 年の歳月では不十分であった。少なくとも 3 世代から 4 世代の歳月が必要であった（1 世代は 30 年とされるから、およそ 1 世紀が必要ということになる：訳者）。それに、本当にそれが定着するためには、それを休日とする集団が定着を目指して一致団結、努力する必要があった。個人だけでは、どう足掻いても定着させるのは不可能である。本当に定着させるには、何世代もの人間が継続的に努力する必要がある。

この本では、1 世代以上も忘れ去られることがなかった出来事や史実だけを問題にする。特定の個人や、短期間しか記憶に留められなかった出来事などを問題にすることはしない。この本が主として問題にするのは、人間の歴史にとって大きな意味を持った革命である。また具体的な中身抜きの抽象論を展開したり、統計的な数字だけを問題にしたりすることもしない。

無名の戯曲家が書いたドラマ、施しに感謝する乞食の眩き、司祭が信者に与える祝福の言葉、群衆の怒りの言葉など、その全てが人間の歴史にとって重要な意味を持つ。ガイ・フォークス Guy Fawkes による国会議事堂爆破の失敗を記念した 11 月 5 日の行事（ガイ・フォークスの人形を子供たちが引き回したあとで焼いてしまうイギリスの行事）、モーツァルトのオペラで有名な「フィガロの結婚」のような話が登場してきたこと（貴族を笑い者にしたこのオペラの登場は、貴族の権威失墜と平民の台頭をよく象徴している）、煉獄にいる全ての死者が天国に行けるように祈る日（11 月 2 日。11 月 1 日の「全聖人の日」の翌日にカトリック教会が定めた祝日で、この日にカトリック教徒は墓参りをする）、アッシジの聖フランチェスコ St. Francesco of Assisi が歌ったという「太陽讃歌 Canticle of the Sun」などは、歴史を説明するうえで重要な出来事である。私は、こうした出来事の意味を大切にしたいと思う。人間には自分のことを説明する能力が備わっているが、自分のことを公共の場で正直に話すようなことはしない。注意しなければならないのは、ときに言葉は真実を隠すということである。しかし真実を隠そうとすればするほど、また言葉が簡単であればあるほど、言葉は重みを持つようになる。花嫁が祭壇のまえで、隣にいる男を夫とするか否かを答えるとき、2 人の男女が子孫を残せるか否か、つまりは人類が存続できるか否かが決まるのである。この結婚の儀式ひとつ取ってみても、その背後に隠されている歴史は我々に見えてこない。花嫁の簡単なイエス・ノーの返事が、動物と人間の違いをよく表している。

祭壇の前の花嫁のように、人間は自分の秘めた決意や選択を言葉にする。しかし毎日の記録を長く（たとえば千年間）見ていなくても、人間が本当に目指しているものは知ることはできる。歴史上、重要な意味を持つ出来事は、非日常的な場で明らかにされるからである。結婚式における花嫁の言葉のように、人間にとって重要な意味をもつ出来事が起きると、特別な言葉・歌・約束・法典が登場してくる。そんな特別な言葉・歌・約束・法典を確認することで、人間は自分の将来を知ることができる。

過去の記録は無限にある。無限にある過去の記録から、我々は意味ありと考えられるものを選択して来ることになるが、当然のことながら我々には、選択の正しさを確認する手段を読者に提供する義務がある。

私個人が有しているかもしれない偏見や迷信の有無を読者に確かめてもらうため、私は話を過去から

でなく現在から始めたいと思う。現在についてなら、読者も私の選択が正しいか否かを判断できるはずである。同時代人として、私と同じことを経験しているからである。

話をロシア革命から始め、そのあとフランス革命・イギリス革命(名誉革命)・ドイツ革命(宗教改革)と時間を遡って説明して行くことにする。この4つの革命は、いずれも世俗世界の支配権を巡って世俗の権力が起こしたものであった。この4つの革命を比較することで明らかになって来るのは、それが相互に影響を与えあっていたということである。また結論として言えることは、4つの革命によって提起されなかった問題が第一次世界大戦によって提起されたということである。「帝国 Empires」・「正義の戦い Crusades」・「教会 Churches」・「国籍 Citizenship」・「支配権 Authority」は第一次世界大戦で問題になったことだが(いまでも問題になっている)、それを生み出したのは1789年のフランス革命でもなければ、1688年のイギリス革命でもなかった。それはもっと古い時代に登場してきた問題であった。

この本の第2部では、第一次世界大戦の結果、見えてきた4つの革命の共通点を指摘してみたい。アメリカ革命(独立戦争)は、その特徴である二律背反的な性格(徹底した世俗主義 vs カトリック教会からの大きな影響、アングロサクソン中心主義 vs さまざまな移民の存在)ゆえに、どう理解したらよいか判断が難しい。そこでアメリカ革命だけは別の章を設けて説明することにした(さしあたり、この章は省略してある)。アメリカ革命は、4つの革命とは違った特殊な革命である。他の3つの革命と共通する特徴を有してはいるが、それでも特殊な革命である。

どの国でも戦争や革命を経験すると、それまでの歴史が正しかったか否かが問題になってくる。この本では全人類的な規模、少なくともヨーロッパ規模の出来事にのみ注目することにしたが、それは第一次世界大戦のあと必要とされているのが全世界を視野に収める歴史であって各国別の歴史ではないからである。

この本で取り上げるのは900年という長期の歴史である。また、これまで知られていなかった事実や新しい発見も紹介して行くことになる。普通なら専門家相手の論文を50年ほど書き続けたあと、10巻くらいの著作集に纏めるところだが(できることなら私もそうしたかったし、そのために論文を書いた)、今回はそのやり方を採用しないことにした。専門家相手に論文を書いているだけでは、ヨーロッパの復興に貢献できないことが判ったからである。さまざまな問題をすべて1冊の本に収めるとなると、いろいろ間違いを犯す可能性が増えることになるが、それもやむを得ない。歴史の女神クリオはユーモアのセンスがあるようで、一方で正確さを我々に要求しながら、他方で我々が正確さを追求すればするほど正確を期すことを難しくする。

この本1冊に全てを収めるということを考えなければ、さらに多くのことが論じられるのだが(たとえばルター派の「堅信礼 Konfirmation」が持った意味、イギリスで「太陽の日 Sunday」が「安息日 Sabbath」になった理由、シェイクスピアやトルストイ、宗教画家グリネワルト Matthias Grünewald が歴史で果たした役割、19世紀文学におけるセックスの問題など)、それは諦めざるを得なかった。大学で学生たちにマリオ・プラーツの『19世紀ロマン主義における肉体・死・悪魔』(1)を読むよう勧めているが、私にとってもっと重要なことは、自分が提唱する新しい歴史学のあり方をアピールすることである。マリオ・プラーツの重要性を論じることは諦めざるを得なかった。

かつて私は、この本に書いたようなことをドイツ語で本にしたことがあった(2)。そのときに採用した分析方法は伝統的で、視野も限られた不十分なものだったが、この本では取り上げなかった多くの事実がその本に紹介されている。専門家の皆さんには、ドイツ語の本も参照して頂ければ幸いである。

史料集やヨーロッパ各国の文化・政治用語辞典も、この本に収録することを考えた。史料そのものを読んで頂くことも重要だし、フランス・イギリス・ドイツ・ロシア各国の文化や政治の相互依存関係を

示す用語辞典を作ることも重要だからである。ラジオが普及し始めた第一次世界大戦後の世界では、とくにこの種の辞典の存在は重要である。たとえば、1931年にドイツ宰相ブリューニク Heinrich Bruening が行なったラジオ演説を例に挙げることができる。彼が演説で使った「魂 Seele」というドイツ語について、フランスの新聞は「道義 morale」、イギリスの新聞は「忠誠心 loyalty」に相当する言葉と論評している。「魂」というドイツ語、「道義」というフランス語、「忠誠心」という英語は、それぞれドイツ人・フランス人・イギリス人の心を熱くする言葉である。そんなことは、どの辞典にも書かれていない。しかし、それぞれの言葉で交わされる「日常会話 viva voce」のなかでは、こうした言葉が大きな効果を発揮しているのである。

この「日常会話」を手がかりに、ヨーロッパ人の「自分自身の歴史 autobiography」を約千年間、現在から過去へと辿り直してみようというのが、この本で私が意図したことである。とくに最後の20年間が重要である。つまり我々の世代が経験した悲惨な戦争体験ぬきでは、ヨーロッパの歴史を語ることはできないということである。

人類全体の歴史にくらべればヨーロッパの歴史は短く、せいぜい27世代を数えるに過ぎない。我々にとって、それは過ぎ去った過去というより現在そのものである。失敗・災害・恐怖・悪癖・失望で一杯の歴史だが、残された記録を頼りに辿り直すことができるのはヨーロッパの歴史だけである。それは過ぎ去った過去のように思えるが、じつは現在そのものなのである。

そこでこの本では、過去900年間の出来事を、いま目の前で起きていることのように扱うことにする。それはまだ我々のなかで伝統として生きているからである。

ただし、ヨーロッパ全域を1人の人間だけでカバーするのは不可能である。私1人が全てのヨーロッパ人を代弁することなどできるはずがない。他者との連帯が大切だとは言っても、私1人で全てのヨーロッパ人と連帯する訳にはいかない。それに私個人の好みとか偏見といった問題もある。しかし、もし読者の協力を得ることができれば、私が抱えている問題も解決することができる。読者自身が属する国のことなら、私よりも読者の方が詳しいはずである。その国の言葉・スポーツ・習慣・作法などについて、もっと詳しいことを付け加えてくれることが期待できる。

読者の自発的な協力があれば、この本の間違ひも減らすことができる。読者のみなさんには、フランス・イギリス・ロシア・イタリアの歴史について、ご存知のことをぜひ付け加えて頂きたい。その分、この本の内容はより詳しくなり、またより均衡が取れたものになるはずである。

読者の協力が期待できなければ、私も千年ちかい歴史を1冊の本で論ずるなどといったことは考えなかったであろう。この本に書かれていることをヒントに、読者も過去に起きた革命が我々の未来を決める現在の問題であることを納得して欲しい。

ふつう1冊の本では、1つのテーマしか扱うことができない。しかも一言で済むようなことを、1冊の本では長々と論じることになる。かつて歴史の何たるかが判っていなかった私は、おなじことをただ繰り返すだけで要領を得なかった。歴史の何たるかが判ったのは、第一次世界大戦を経験してからであった。革命こそがヨーロッパの歴史を解く鍵だと判ったのである。戦後20年間、私が取り組んできたのは革命の問題だけであった。果たしてそれで良かったのかどうか。戦後の世界は急速に変化している。その変化ぶりは、まるでギリシャ神話に登場してくる変幻自在のプロテウス Proteus のように捉えどころがない。ところが、私は20年間、革命の問題だけを考え続けてきたし、これからも考え続けていくつもりである。時代の変化に取り残されることは間違いないが、私自身そのことを十分に承知しているつもりである。私は、あえて時代の変化を無視してきた。そんな人間が1人くらいいてもよいのではないかと考えていたからである。

従来の政治思想は、「進歩の神話に囚われすぎていた poured the strong wine of progress into the water of human traditions」。「私は革命の伝統を大切にしたいと思う I wish to pour the water of patience into the strong wine of revolutionary excitement」。第一次世界大戦を経験した同じ世代の人間が、意味のない進歩の神話に惑わされないことを願うのみである。

戦後の 15 年間は全てに「急ぎすぎた too early」。急ぎすぎると人間、自分を見失って仕舞うことになる。我々の知性・意志・努力など、すべてが無駄になってしまう。また焦りを募らせると、「果たすべき使命 secret destiny」も果たせないことになる。

そこで私は、あえて急がないことにした。意図的にグズグズすることで、時間の経過を少しでも遅らせたいと思う。現代人は何ごとにも急ぎすぎる。

「時間は本来の意味を失ってしまった The end of time is close upon us, in the technical sense of the word」。第一次世界大戦が終わって 4 年たち、全世界に向けてラジオ演説ができるようになった現在、時間が有り余るようになった。「豊かさの経済学 economists of plenty」はさまざまな余裕を約束してくれるが、とくに余りそうなのが時間である。有り余っている時間を有益に過ごすのはむずかしい。有益な時間の過ごし方、これこそが人類史上、最大の課題であった。余暇を有益に過ごす方法を見つけるより、働き続けている方が簡単である。どれくらい働いてどれくらい休むか、時間を適切に配分する方法を見つけるのは簡単でない。

革命が起こるたびに、時間に対する考え方が変わってきたことも考慮に入れる必要がある。現在・過去・未来の意味が変わったのである。革命が起こるたびに時間に対する考え方が変わり、生き方が変わるようになった。適切な現在・過去・未来の関係（聖アンブロシウス St. Ambrosius の言う「時間のあり方 tempora tempora」）が、革命のたびに問題にされてきた。古い時間のあり方が革命のたびに、ガラス製の体温計のように粉々に壊されてきた。空間の 3 次元より、時間の 3 次元（現在・過去・未来）の方が遙かに重要な意味を持っていることに我々は気づいていない。

「新しい革命学 new science of revolutions」によって、なぜ人間の決断は「早すぎたり too early」「遅すぎたり too late」するのか、また「適切なとき timeliness」はどうすれば判るのか解明してみたい。こんなことを書いてしまうのは「早すぎる」かもしれないが、読者のなかには本文まで読む時間的な余裕がない方もいらっしゃる可能性がある。

この本では、人類がどのようにして時間を無駄にしないように努力してきたか（永遠に生きられない人間にできることは、それだけである）、またその努力がどのように無駄にされてきたかを説明するつもりである。